

「登科後」(昔日のあくせく誇るにたらず) 孟郊

「昨日のあくせくそれはそれ」

AKY訳

昨日のあくせくそれはそれ

今日の楽しみかぎりない

春風の中車に乗って

京(みやこ)の桜はなを見尽くすぞ

(原詩)

「登科後」

孟郊

昔日齷齪不足誇

今朝放蕩思無涯

春風得意馬蹄疾

一日看盡長安花

(読み下し文)

「登科(とうか)の後」

孟郊

昔日の齷齪(あくせく)誇るに足らず

今朝(こんちょう)放蕩(はた)思い涯(はて)無し

春風(しゅんふう)意を得て馬蹄疾(はや)く

一日看盡(みつく)す長安の花

「昨日までの苦勞して勉強していたときのこと、自慢にもならないが、合格したあとの今朝となつてみれば、のびのびとして楽しくて仕方がない。過去のあくせくしたことは忘れて、今日は一日、都じゅうの桜という桜をすべて見て回るぞ」

登科とは、科挙に合格すること。出世して高級官僚になるためには、科挙に合格するほかはないのだけれど、合格率は1%、百人に一人程度だったといわれています。何度受けても落第を繰り返すものもあれば、七十過ぎてようやく合格したという話もあります。孟郊(七五〜八一四)もその一人だったようで、五十ちかくなつてようやく合格したそうです。気難しい男だったといわれていますが、この詩には、さすがにうれしさが表れています。

科挙の合格発表は、三月、勅許によって合格者は、王侯貴族の邸宅の庭を自由に回ることができたそうです。当時の中国では、牡丹の花が流行で、中にはひとつの花の値が中流階級の十軒分の税金と同じというものもあつたらしい。その時期の都の騒がしいことは、「一城の人皆狂うが如し」と書かれています。

合格者は、自由にそのような見事な花や庭を見て回れるということで、都中を意気揚々と馬で走り回ったということです。

日本だったら、さしずめ桜の季節の京都のようなものではないかしら。今日では、さすがに馬は飛ばさない、いわば、シーズンの京の街中を、タクシーを借り切つてみてまわるということでしょうか。

孟郊は、詩人としてはともかく、官僚としては、あまり有能とはいえなかったようです。仕事が怠慢だということで、官位を落とされたこともあつたらしい。結局、不遇に終わったということです。

松下緑さんは、下のように「昔日」を文字どおりに「昔」として「ムカシハシタモノダ」と訳しておられます。おそらく「合格してしまつた今では、数日前のことも遠い昔のように思える。」ということなのでしょう。

私は、「長年の苦勞が報われた。」という思いを、もう少し表現したいと思つて、「昨日のくそれはそれ」としてみました。

【参考】他の方々の訳詩

「昔ハアクセクシタモノダ」

松下緑訳

昔ハアクセクシタモノダ

今朝ノ樂シミ果テモナイ

春風ヲ背ニ馬ヲ馳セ

ヒネモス京ノ花メグリ